

『ペンタゴン・ペーパーズ 最高機密文書』

2017年/アメリカ/スティーヴン・スピルバーグ監督作品

巨大な権力に立ち向かい、
自由を勝ち取る矜持を学ぶ

会員 植村 公彦 (60期)

『ペンタゴン・ペーパーズ 最高機密文書』
Blu-ray: 1,886円+税
DVD: 1,429円+税
発売中
発売元: NBCユニバーサル・エンター
テイメント



2019年1月17日、ワシントン・ポスト紙のデジタル版で配信された、「日本ブランド失墜 (Brand Japan is taking a hit)」という記事がある。記者のジェフ・キングストン氏は、カルロス・ゴーン氏の事件について、日本の「人質司法 (Hostage justice)」を厳しく糾弾した上、近時の様々な事例を挙げて、年配の保守的な男性エリートたちが日本ブランドを失墜させていると結んでいる。記事への賛否は措くとしても、文章から伝わってくるジャーナリズムの力強い息吹は、日本のメディア環境をめぐる閉塞感を自覚させるには十分過ぎた。そして、配信元がワシントン・ポスト紙であったことを確認して、映画「ペンタゴン・ペーパーズ」のことを思い出し、彼の国ではジャーナリズムが生きていることにささやかな羨望を抱いた。

本題の映画の話に入ろう。「ペンタゴン・ペーパーズ」は、日本では2018年3月に公開された映画だ。ニクソン大統領がウォーターゲート事件を契機に失脚したことはよく知られており、その経緯は「大統領の陰謀」(1976年)という映画に見ることができる。「ペンタゴン・ペーパーズ」は、ウォーターゲート事件の伏線となるニクソン大統領のベトナム戦争を巡るスキャンダルを暴いたワシントン・ポスト紙の編集者や記者たちの奮闘を描いた映画だ。「奮闘」といっても、ただ一生懸命走り回った、という意味ではない。現代の某大統領の姿を見ればお分かりになるように、アメリカの現役大統領という、日本の総理大臣よりもはるかに強大な権限を持つ権力者に戦いを挑み、そのスキャンダルを暴く、まさに命がけの戦いだ。あの手この手の妨害工作、会

社が潰れる危険、出資者たちや雇われ弁護士たちの反対の声。それらを乗り越えてまで、彼らが守ろうとしていたものは、アメリカ合衆国憲法修正第1条、つまり報道の自由だった。報道の自由を守ろうとするその魂の声は、日ごろはライバルである他の新聞社たちとの共闘を生み、結局彼らは勝利する。そして、その力のはのちにウォーターゲート事件で現役大統領の前代未聞の失脚へとつながるのだ。

この映画は実話をもとにしている。実際はもっとドロドロした話もあっただろうし、きれいごとでは済まない話もあったと思う。しかし、報道の自由を守ろうとする精神と魂の美しさを、映画はその美しさのままに、忠実に表現している。そこがいい。魂の美しさを生々しい現実の中から抽出して伝えられるのは、芸術の特権だ。

巨大な権力に立ち向かい、自由を勝ち取る矜持を、私はこのアメリカの映画から学んだ。その矜持は今も生きていることを確認できたことにも、とても勇気づけられた。しかし、その契機が「日本ブランド失墜」であり、「人質司法」についての記事であったことは、日本の法曹としていささか悲しい。私たちはジャーナリストではないが、自由と権利を勝ち取り、守ることに資するべき法曹だ。その矜持と魂の美しさこそが、時を超え、世代を超え、国境を越えて私たちを結びつける、目に見えない、しかし、固く強く、また永続的な紐帯であることを、私は信じる。そんな青臭いけれども忘れてはならない心を思い出させてくれたことをもって、本映画鑑賞の勤めの結びとしたい。